

C/

實
驗
曰
本
修
身
書
卷
三
尋
常
小
學
徒
用

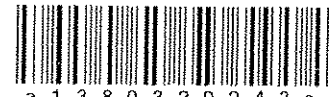
T1A3
22
W46j

日八十月九年辰癸
濟定檢省部大

三宅米吉校閱
中根淑
渡邊政吉編纂
實驗
日本修身書卷三
尋常小學
生徒用

東京 金港堂書籍會社

圖書 和図書 遡



a 1 3 8 0 3 2 9 2 4 3 a

福岡教育大学蔵書

第一課 父母の恩

我が身は父母よりうけたれば、父母は我が身の本なり。其の上、我はうまれはじめより、父母の養育によりて、人となれり。うまると育てらるると二つの恩あり。其の恩の、かく大いにしてきはまり

なきこと、たとへざるにものなり。よろづ

才行サイカウうるはしくとも、孝にたれうかなれ

サニ オコナヒ

ば、其餘はみるにたらず。故に人の子たるものは、まづ父母に事ふるみちを早く學びてゐるべし。孝のみちにうるときは、たろかなることのいたりなり。

第二課 孝行

むかー伊勢の國に
萬吉といへる孝子
あり父は早く死し
母は病ひがらにて
家業をいとなみかね



ければ萬吉は日日海道にいで旅人の
にもつなどをになひ貸錢をとりて母
を養ひ且藥をもとめて母にすすぬ
孝行をつくければ人人あはれみて
これをたすけたり
父母に事へてはよく其の力をつへす

第三課 孝行



市郎兵衛は幼き時
よりよく父母のおふせ
をまもり又つねに
敬ひ尊びて、かりそめ
にも敬禮をかきたる

ことなほ朝は早くたきて父のたきいづる
をまち其の外に出づる時はむくりむかへ
をなしてねんごろにいたはりたり。
父母年老いてのちはたほかた
かたはらをばなれず出入には
手をひきうしろをかかふべし

第四課 教睦

一家の内はただやかなるをよ
とすことばただおひなどなきやう
にふかくいまむべ。

小左衛門兄弟は久く一家にすみ家族
十七人ありけるが行ひたたく交りあつかり

かば其の妻子供たちもこれをみならひ
兄の妻は弟の妻を愛しみ弟の妻は
兄の妻を敬ひ年上のものは幼きもの
をあはれみ幼きものは年上のものを尊び
家内きはめて睦かりかば其のこ
國主にきこにてはうびをたまはりたり。

第五課 友愛

世の中には、兄弟姉妹ほごたのもき
ものなければ、兄弟は、弟妹を愛し、
弟妹は、兄弟を敬ひて、つねに睦み
交るべし、もー兄弟姉妹の中、ふーあはせ
に、病ひにかかり、さいなんにあふ

ものあらば、心をつくりて、なぐさめあひ
力をつくりて、たすけあふべし。

たつ女は、つねに兄を大切にしける
が、兄眼をやみて、盲目となりたる
のちは、殊更に心を用ひて之を
いたはりたり。

第六課 朋友

善き友に交れば、善き人となり、
惡き友に交れば、惡き人となる。
は、恰も朱にてろむれば、赤くなり、
墨にてろむれば、黒くなるが如し。
されば、かゝるとき人も、交る友を見て

其の人からを知る。といひ、又「善惡は
友を見よ」といひて、友をばらぶべき
ことをそへたれたり。友をばらぶ
ことは、實に心を用ふべし。

交る友を見て、其の人からを知る。
善惡は、友を見よ。

第七課 交際

藤原忠平は、左大臣

時平の弟にて常に

右大臣菅原道真と

交りあつて道真

時平のために讒せ



られて遠き國へりづけられたるのち

も忠平は常に書をよせ物をわくりて

其の心をなぐさめ親しみ前日にかはらざり

といふ人の交りはかくころあつたけれ

信は心に誠あるなり心に誠

あれば言行の上にあらはる

第八課 禮儀

凡^{オヨ}ろいかなる人^{ヒト}にても平生^{ヘイゼイ}心^{ココロ}を用ひて
立ち居^{タチイ}ふるまひをつつめば、ついに
慣^{ナラ}はしとなりて、殊更に心を用ひざる
も、自ら奥^{オウ}ゆかきふるまひをなす人^{ヒト}と
なるなり。も、常にいやきふるまひを

なす時は、又同く慣^{ナラ}はしとなりて、行儀^{ギョウギ}
よからざる人^{ヒト}となり、はかに心を用ひ
てあらためんとするも、たやすくは
あらためがたし。故に立ち居^{タチイ}ふるまひ
は、つねづねつづむべきことなり。
身は慣^{ナラ}はし。習ふより慣^{ナラ}るる。

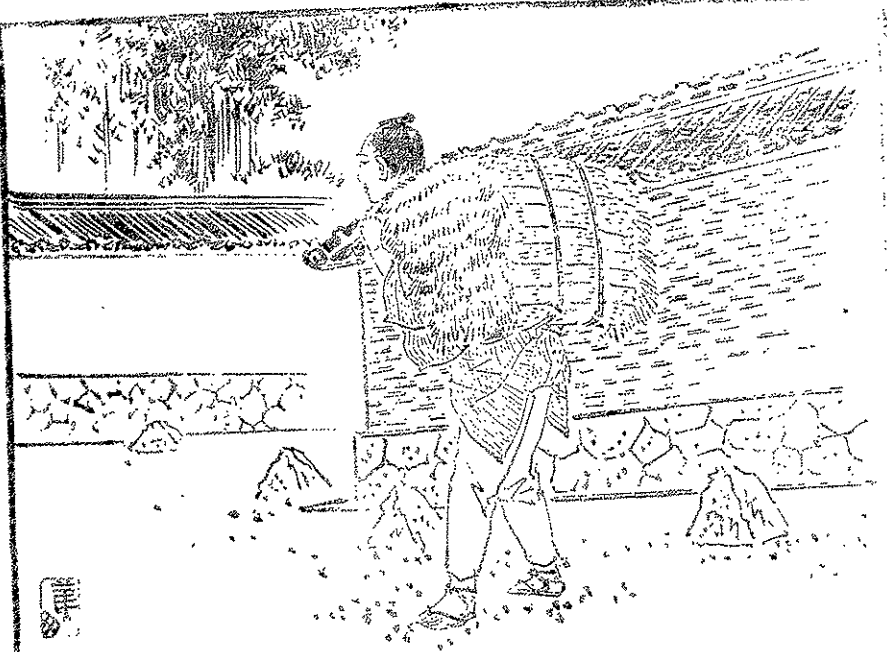
第九課 謙讓

才學をつつみてはこらず、富貴をわすれ
て人をーのがさるものは、自ら奥ゆがく
見ゆるものなり。

藤原忠實は、つつーみふかき人なり、
年三十歳あまりにーて、關白の職に

のぼり、牛車にのることをゆるされ、たれ
ども、たゞれつつーみて、スーくのらず
四十一歳に及びては、どめてのりたり。又
其の孫兼長、家からをたのみて、人にぶれい
なりーかば、深くいまめをくはへたりとぞ。
恭ーければ、患へに遠ざかる。

第十課 師恩



莊六シヤロウは、いさけなく
して、たたみやに
ほうほうこうこう、其のわざ
をならひたり、のち
主人眼をやみて、家

―だいにたさうへければ、日ごろの恩に
むくいんとて、いよいよ業をはげみて、くら
―をたすけ、年期シキあくるも、なほことまり
て、ねんごろに主人に事へたり。
父にあらざれば、生れず、師シにあらざれば、知ら
ず、故に父師に事ふること、一の如くすべし。

第十一課 寛裕

細井平洲は心ひろく
して、つろみふかき
人なり、或る時書生
某といふもの、塾の
金を私しけるに



含容して問はず、其の國にかへらんと
しける時、刀を錢にあたへあつくもてな
しかば、某深く感入り、再びかへりきたり
てひろかに其の金をつくのひ、且これより
大いに塾の利益をはかりとる。
人小過あらば含容して之を恕べ。

第十二課 躬行

伊藤東涯は行ひ正しき人なり人若し
東涯に向ひて「某はかくかくの悪事を
爲したり」といふば人を誅するは悪きこと
なりとて更に取りあはず又某はかくかく
の善事を爲たり」と語れば人をほむる

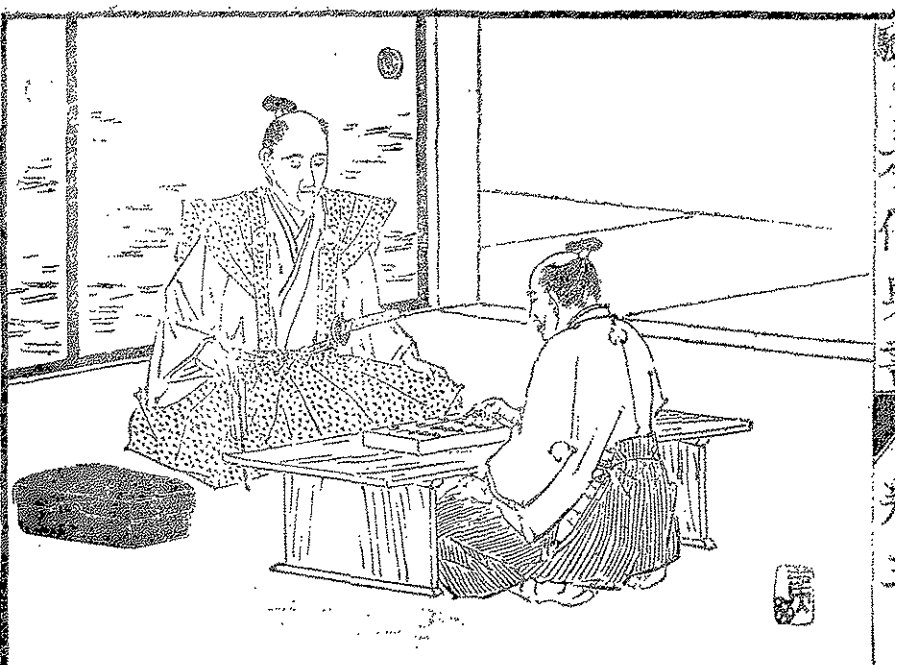
は善きことなり」といひて共に其の事をほめ
たり又或る時人に語りけるは「行儀を修め
生産を治め身體を保つこの三つのものは
人の道の立つ本なり」といひて親らも之を
勤め人をも之にみちびきたりといふ
其の善をあげよ其の惡をされ

第十三課 思慮

萬づの事つらつら思案して後のあやまり
なく悔いながらんことをはかるべし。

板倉重宗重昌といふ兄弟のもの主人徳川
家光より裁判のさばきかたをたづねられける
に弟重昌は直ちに答へたれども、兄重宗は

二三日のいうよをこひて同くことを答へたり。
後其の父勝重家光に見えし時家光この
事を語りければ勝重は「思慮足らざれば
後悔することありまゝて裁判の事は
猶更心を用ふべきことなり」といひしとぞ。
後悔さきに立たず。



第十四課 續密

野田文藏は算術の
達人なり。或るとき
大岡忠相、まねきよせて
百を二つにわれど
いひけるに、からから

しくこたへずろろばんをかりうけて
ていねいに計算を為し、五十なりとこたへ
ければ、忠相大いに感心し、「かくてこそ、
大切の役目をまかすに足れるなれ」とて、
勘定役といへる重き職をさづけたり。
念には念を入れよ。

第十五課 儉約

用をつづまやかにすること、其の益甚だ多し。
儉約なれば、奢らず情らずして、其の徳を養ふ
べし。儉約なれば、食味淡くして、身を損はず
生を養ふべし。儉約なれば、人に求むることなく
して、廉を保つべし。儉約なれば、人と利を争は

ずして恨みに遠ざかるべし。大かたの人の
習ひ、つづまやかなるを弛べて、奢らんこと
は易く、奢れるを止めて、つづまやかにする
ことは難し。然れば家を治め、子孫に傳ふ
るの法、儉約に―くものなり。
節儉は、人の美德なり。

第十六課 節儉

日根野某といふ人なり
たる金を返さんとして
黒田如水のもとへゆき
けるに、折りやう。或る
人より一つのたいひを



れくりたり。如水其の中をちをすひもの
にて、日根野をもてなうければ、日根野は
心の中に其の吝嗇をいやみ。が金を
返すに及び、如水引れば、進上せうつもりなり。
とて受け取らざり。かば深く感入る。とぞ。
積んでよく散す。

第十七課 慈仁

人に施すとは念ふべからず。武助といへる人は勤儉にして慈悲の心深く貧乏きものには陰に米を恵み



て、「人に語るなかれ」といふめ、衣服を施しては心にまかせぬこと多い」といふなり。金をかりたりといふもあれば、快く貸し與へて利子を取らざりき程なく其の事領主にきこければ米若干を賜はりたりとす。陰徳あるものは、陽報あり。

第十八課 仁怒

堀秀政は思ひやりふかき人なり。或る時
士民其の政をろりろりに自らあらためて
之をどがめず。又人夫の「荷物重くてになひ
かた」といへるを聞き、自らもちこころみ
て、荷物の目方をへらへたり。又軍にのぞみ

ける時、旗もちをはるかにたふれければ、「これ
我が馬の早きゆゑなり」とてあゝの
たふき馬にのりかへたりといふ。之を見
ても、其の平生を知るべきなり。
己の欲せざるところは人に
ほどこすことなかれ。

第十九課 立志

人の一生は、志の
大小によりて、初めより
大方定るものなれば、
少年のものは、其の
志を高くと大いに



一、着實に事を行ひて、末の榮耀をはかる
べし。苟も疎放にして、勤めず、卑小にして
自ら侮るが如きことあるべからず。
毛利元就は、幼くして大いなる志をいただき
しが、遂に山陰山陽十箇國の領主となりたり。
志を立てることは大いに高くすべし。

第二十課 動勉

昔京都に圓山應舉といへる畫工あり、生き物の
姿を寫すは手ぢかの物より始むるに「かず
とて一年餘りの間、日日祇園の社にゆきて、雞
をながめたりやがて之を額に畫き、其の社
に納め、いづかに人人の評をききけるに、或る

日、野菜賣りの翁之を見て、雞の傍に草を描
かざり「はなも妙なり」といひければ、應舉すみや
かに翁をといてくは「くろの事をたつねたり
とぞ。應舉はかくの如く認めはげみて、怠ら
ざり」かば遂に名高き畫工となりたり。
為さずんばなんぞ成らん。

